

企業組合「くれすとはすてる」訪問

編集後記

5月に民生委員児童委員心身障がい者部会で「くれすとはすてる」を訪問し、大佛理事長から説明を受けました。

ここは障がいのある方が働いて自立するための作業所で、主に3つに分かれています。一つは客のニーズに合わせて食事、弁当を提供するキッチンです。二つめはドーナツやシフォンケーキ、バースデーケーキ等お菓子を製造するサポーターです。

三つめはペットのトリミング、ハンドメイド作品、ゆめの森公園での販売、パソコン作業等、客の用途に合わせた仕事をするエースはすてる。この外に「施設外作業」として、高齢者施設、ホテル客室の清掃、野菜の選別、公園清掃、接客業、除雪や草刈り、移動販売等多岐にわたって取り組んでいます。様々な作業所に利用者さん

んを送迎するため車を手配するなど気を抜くことができないと話されていました。

また、「笑顔あふれる職場」「ひとりひとりが障がいを乗り越えて」「地域に貢献して」をモットーにして活動しており、障がいを持つ利用者さんが楽しく働くことを大切にして運営しているとのことでした。

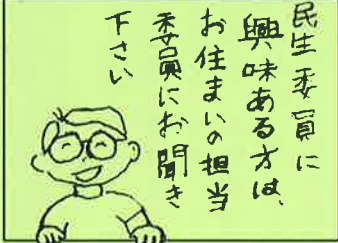
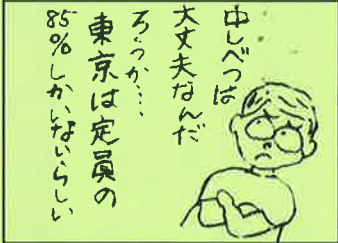
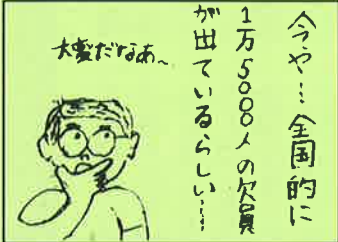
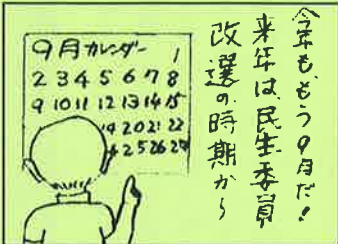
「くれすとはすてる」を始めた契機も聞きました。理事長は障がいを持つお子さんがおり、子育てにも苦労したそうです。養護学校に進学し、就職が出来るのか不安だったそうです。企業実習に参加したが、仕事が出来ない



と言い出しました。そんな折り、ジョブコーチから細やかな指導を受け、個々に応じた対応や方法で丁寧に教えれば仕事ができちんと出来るようになると思通しが立ち、おかげで息子は元気に働けるようになりました。

このように利用者さんの個性に合わせた指導をすることで作業所を運営すれば障がいのある人も元気に働けると思「くれすとはすてる」を立ち上げました。手探り状態で苦労も多かったが、現在多くの利用者さんが楽しく元気に働いていることが嬉しうですと話されていました。

(山上 裕和)



◎本誌へのご意見や問い合わせなど、身近な民生委員児童委員にお寄せ下さい。

町内会女性部の日帰りバス旅行に参加しました。さくらんぼ狩りや、道の駅めぐり等々、コロナ禍以降久しぶりの行事でした。最近の暑すぎる夏が心配ですが、車窓から見えるじゃがいもや蕎麦の花、一面の小麦の穂など豊かな道東の風景がきれいで素敵でした。昨今、町内会に加入せず、関心もないという世帯も増えていくそうですが、同じ町内会のご近所さん同士の活動をぜひ一度でも経験してほしい！

「休日にお金ももらえないのに町内会の手伝いなんてしない」という人もいますが、町内会活動は人のちからが必要ですし、そのちからを借りることがあるかもしれません。

夏の女性部のバス旅行は、「暑いから水分とってえー」の掛け声が飛び交う中、ご近所さん活動がとても楽しい一日でした。

三宅 浩美

民児協だより

ふれ愛



この広報誌は赤い羽根共同募金の助成を受けて発行しています。

=第64号=
令和6年9月発行

中標津町民生委員児童委員協議会
(中標津町役場町民生活部福祉課内 ☎73-3111)

「相手を大切にし、思いやりの心を」



中標津町民生委員児童委員協議会
総務企画委員長 小田 一夫

2022年2月24日にロシアによるウクライナへの全面侵襲から2年半にもなるが、未だ終結のメドは立っていません。その間、兵士はもとより数多くの罪のない一般人の人々が尊い命を落とし、家族・親類を亡くし、住む家も破壊され、食べ物もない苦しみを味わっています。

イスラエルとハマスとの戦いも同じで、毎日多くの犠牲者が出ています。特に小さな子どもたちが傷つき、泣き叫ぶ光景は画面で見ても、胸が痛くなりなます。一部の独裁者の愚かな考えや行動で平和な生活が脆くも崩され、難民となったりしています。一部の権力者は宮殿のような家に住み、美味しい物を食べ、贅沢三昧の生活をし、他人の命や苦しみを理解する気など毛頭ない。だからこんな残酷なことが出来るのだろう。逆にも自分の愛する家族が殺された

り、家もなくなったり食べ物もない状態に追い込まれたとしたら、どうなるのだろう。21世紀になってもこの有様。なんと愚かなことだろう。

先日、テレビの「街歩き」という番組でマレーシアのクアラルンプールで「人間は永久に生きられないのだから、分かち合って生きるべき」という言葉が出てきたので思わずメモをしました。全く同感です。大国、広い国土を持つ国は、ほかの国に攻め入って自国の領土にしようとしたり、なんと欲が深く嘆かわしいことでしょう。自分さえ良ければいいといった思い、考えです。

皆、同じ人間なのだから、人権意識の根本である自分と同様に相手も「大切にし、思いやりの心を」少しでも持てばと思うのですが…。

令和6年度中標津町民生委員児童委員協議会

●●●●●施設見学研修会●●●●●

6月10日から12日まで2泊3日の日程で、旭川市を中心に研修がおこなわれました。今回は委員24名と事務局1名の計25名が参加しました。初日の研修の一つ目は旭川少年鑑別所（旭川法務少年支援センター）で、主に施設見学と「非行少年の心理等、少年鑑別所の業務について」を受講しました。夕方に市内でバケツの水をひっくり返した様な豪雨に見舞われました。2日目は、社会福祉法人児童養護施設旭川育児院を訪問。施設見学と「児童虐待防止・養護施設育児院」の施設説明とお話をうかがいました。昼食は大雪地ビール館で食事をして、滝上町のハーブガーデンを訪れました。庭園には世界各地のハーブが名前入りで植えられ、丁寧に整えられた花の中でベンチに座るとまるでメルヘンの世界にいるようでした。2日目の夜は紋別のホテルに宿泊し食事とお酒で親交を深めました。3日目オホーツク流氷科学セン



ター見学。学芸員の方が流水の出来方を実際に氷や器具を使い再現して下さいました。オホーツクの四季を映すドームシアターでは、豊かな自然や動植物を見事な画像と音楽で上映し、あらためて自然の美しさ、雄大さを目のあたりにしました。昼食を網走でとり、最後は、北方民族博物館見学。そこは6、11世紀にかけてのオホーツク文化や世界各地の北方民族についての資料や道具、衣服についてのたくさんさんの展示があり、アイヌの文化や東はグリーンランドのエスキモー、西はスカンディナヴィアのサビまでの諸民族の文化とふれあうことが出来ました。この研修で普段会話を交わすことのなかった方と触れ合うことで親しくなり、また見聞を深めることとなり大変意味深い研修となりました。

（山上 裕和）

旭川少年鑑別所を訪問して

少年院と少年鑑別所は二ユースなど耳にする施設ですが、少年鑑別所は処分内容が決まる前の段階で家庭裁判所の求めに応じて収容され鑑別を行う施設です。

少年院は家庭裁判所での少年審判に於いて送致された少年に矯正教育や社会復帰支援等を行う施設です。少年鑑別所は全国に52カ所あり、法務少年支援センターとも一つ一つの名称で地域の相談機関の一つとして活動



を行っており、相談ダイヤル0570-085-085から最寄りの支援センターに繋がります。今回研修しました旭川少年鑑別所は昭和24年に設立され平成13年に現庁舎が建てられ15室、20名の収容が可能で14名の職員の方々が4週間、特に必要な場合、最長8週間規則正しい生活を送れる様に指導、助言、行動観察を行います。自由な生活とは違い慣れない子供が多いとの事です。近年暴力行為等での収容は減り、お金に困っていないのに万引きしたり、学校や地域、家族の中で自分の居場所を求めている時に不良グループに誘われたり、反社会的集団から一人の人として大事であると思われ、言葉巧みに犯罪に巻き込まれてしまいうちの子が増えているそうです。説明を受け施設内を見学する時には、カメラ、携帯電話等の持ち込み禁止でドアの開閉ごとにアラームが鳴りパトランプが点灯し現実の世界と違い気の引き締まる感じでした。きつと少年達も同じく感じ、職員の方々の更生への思いを受け取り、新たな気持ちで審判を受ける事を強く望みます。また我々大人も少年と同じ目線で一人の人として対等に向き合う事の大切さを感じた研修でした。

（杉本 和玄）

児童養護施設旭川育児院の取り組み

研修2日目は、児童養護施設の旭川育児院を訪問しました。最初に多田院長から子育てを取り巻く社会状況や課題、子どもの虐待、育児院の取り組みの説明を受け、その後施設を見学しました。

児童養護施設は、家庭環境に事情のある児童が家庭の代わりに生活をする福祉施設です。

今現在幼児7名、小学生24名、中学生19名、高校生13名、大学生等11名の74名が入所し、入所者の66%が虐待経験者で、障がいを持った児童も54%、世帯構成は、ひとり親66%、両親死亡11%です。虐待経験児童は、愛情遮断症候群、PTSD、感情や感覚の調整障害、自己肯定感の低さや大人への不信任感を抱え、更に入所者が見捨てられた不安や新たな関係性への不安、自己変革への不安等も抱えて生活しています。

育児院では、子どもが自分の存在について「生まれてきて良かった」と思い、自信が持てるように「子どもの権利と常に子どもの最善の利益を優先した支援」に心掛けています。また、専門職員による心理的・医療的ケアを継続的に行っています。

職員を困らせる言動は、子どもの困り感であると捉え、常に子どもと一緒に課題を解決していくとの院長の



言葉が心に残りました。また、退所児童及び満18歳以上の人に対する必要な時に必要な支援が困難であったことや、貧困と児童虐待等の世代間連鎖を断ち切る必要性を強く感じたことなどから新たに地域・自立支援部を設置し6名の専任職員を配置して退所後のアフターケアを行う等継続的な社会的自立への支援体制を構築していることにも深い感銘を受けました。

（松本 毅）

楽しかった！フレンドリー・サマーキャンプ

7月27日（土）10時～15時、中標津町緑ヶ丘森林公園で第28回なかしべつ町フレンドリー・サマーキャンプが開催されました。参加者は子ども・父母等の一般43名、ボランティア・実行委員会67名（うち民生委員児童委員協議会15名）でした。

午前は5つの班に分かれて自己紹介と班長を決め、班ごとに新聞紙を利用したフリスビー（円盤）、ストローと紙を利用したロケット、紙とビニールテープを使ったプーメランの工作を行いました。フリスビーが意外と遠くまで飛ぶのに驚きました。

昼食はカレーライス、美味しく思わずおかわりしました。



午後は屋台で綿アメ、ポップコーン、スーパースポーツ等を楽しみました。班対抗でのストラックアウトも盛り上がりしました。ビンゴゲームは参加者全員に景品が当たったのは嬉しいことでした。

最後に各班の班長さんからキャンプの感想を発表してもらいました。「楽しかった」「来年もみんなで会いたい」「来年のキャンプの準備もよろしく願います」などの感想でした。

私は初めての参加でしたが、ボランティアと実行委員会の皆様が自然体で喜んで楽しそうに奉仕している姿や、年齢、性別、障がい、担当する奉仕等の違いを超えて、参加していた一人一人が自然体でキャンプを楽しんでいたのが心に残りました。

私も楽しかったので来年も参加したいと思いました。皆様、お疲れ様でした。

（石垣 弘毅）

